

患者の経済的な困窮状況や孤立状況に、がん相談支援センターは機能しうるのか～患者体験調査からみた予備的検討

研究分担者 高山 智子 国立がん研究センターがん対策情報センターがん情報提供部

研究分担者 若尾 文彦 国立がん研究センターがん対策情報センター センター長

要旨

第3期のがん対策推進基本計画が2018年度に策定され、がん対策の進捗状況を継続的に把握するとともに、現在の状況の改善点や改善方法を見だし、次のがん対策の計画や検討に反映させていくことが求められている。本検討では、がん相談支援センターの利用状況により、がん患者の経済的な負担状況や孤立状況についての患者の体験は違いうるのかを検討し、今後の対応策の検討視点となるかについて予備的な検討を行った。

2015年度に行われた第一回「患者体験調査」の調査データを用いて、「経済的困窮への対応」および「がんになっても孤立しない社会の成熟」を把握する目的でもうけられた全8設問について、がん相談支援センターの利用状況との関連を検討した。

今回の予備的な検討では、がん施策として設けられているがん相談支援センターの利用状況により、患者の体験が異なり、経済的な状況や社会的な孤立状況がより困難な場合に利用割合が高くなっていった。がん相談支援センターの存在や利用は、患者の体験に対して機能しうる施策であると考えられた。

A. 研究目的

がん対策を進める中で、がん対策の進捗状況を把握するための指標の開発および測定取り組みが進められている。第2期がん対策推進基本計画では、全体目標の達成度を測定する指標について、①「医療の進歩」、②「適切な医療の提供」、③「適切な情報提供と相談支援」、④「経済的困窮への支援」、⑤「家族の介護負担の軽減」、⑥「がんになっても孤立しない社会の成熟」の6つの要素があり、これらの指標測定が2014年度の「患者体験調査」により実施された。しかしながら、6つの要素のうち、特に経済的な負担に関する内容やがんになっても孤立しない社会の状況に関して把握するための設問の測定結果について、想定とは異なる印象を持つ者が多く、設問が適切に状況を把握するものになっていないのではないかと指摘があげられ、本研究班の中で、より妥当な設問作成が検討された。

第3期のがん対策推進基本計画が2018年度に策定され、新たな設問を含めた第2回目の「患者体験調査」が2019年度に実施されている。今後、がん対策の進捗状況を継続的に把握するとともに、現在の状況の改善点や改善方法を見だし、次の

がん対策の計画や検討に反映させていくことが求められる。がん患者の経済的な負担状況や孤立状況に対する直接的な施策は存在しないが、がん施策の中で対応しうる対応方法の一つとして、困っている状況や可能な対応方法を相談する場として、がん相談支援センターが設置され、対応が行われている。そこで本検討では、がん相談支援センターの利用状況により、がん患者の経済的な負担状況や孤立状況についての患者の体験は違いうるのかを検討し、今後の対応策の検討視点となるかについて予備的な検討を行った。

B. 研究方法

本検討では、2014年度に行われた第一回「患者体験調査」の調査データを用いた（指標に見るわが国のがん対策、H27年11月）。

「経済的困窮への対応」を把握する目的で設けられた設問「問20. 治療費用の負担が原因で、がんの治療を変更・断念したことがあるか」、「がんになっても孤立しない社会の成熟」を把握する目的でもうけられた設問「問37. がんと診断されてから、家族から不必要に気を使われていると感じるか」「問38. がんと診断されてから、家族以外の

周囲の人から不必要に気を使われていると感じるか」「問 25. そのとき働いていた職場や仕事上の関係者にがんと診断されたことを話したか」に加え、仕事や家族に関連する全 8 の設問について、がん相談支援センターの利用状況との関連を検討した。(倫理面への配慮)

2014 年度に行われた「患者体験調査」は、「疫学研究に関する倫理指針」に沿って国立がん研究センターおよび参加施設の倫理審査委員会の承認を得て実施されている。

C. 研究結果

表 1 に、がん相談支援センターの利用・認知状況と経済的・社会的な状況に関わる患者の体験を示した。「経済的困窮への対応状況」に関連する設問では、「問 20. 治療費用の負担が原因で、がんの治療を変更・断念したことがあるか」だけでなく、その他の「問 21. 治療費用負担の問題がなければ受けたであろう治療」「問 24. がんと珍談されたときの収入のある仕事の有無」「問 26. がん治療中に、治療と仕事を両方続けられるような支援や配慮を職場で受けたか」について、いずれも経済的左右を受けうる回答選択肢において、全体の回答分布に比して、相談支援センターを利用したことがある割合が高くなっていた。

また、「がんになっても孤立しない社会の成熟」に関連する設問においても、「問 25. そのとき働いていた職場や仕事上の関係者にがんと診断されたことを話したか」で、「広く・一部に限定して話した」と回答した割合が、全体の回答分布に比べて高くなっていた。また「問 37. がんと診断されてから、家族から不必要に気を使われていると感じるか」「問 38. がんと診断されてから、家族以外の周囲の人から不必要に気を使われていると感じるか」「問 39. 周囲(家族、友人、近所の人、職場関係者など)の人からがんにに対する偏見を感じるか」のほぼいずれにおいても、全体の回答分布と比べて、「よく/ときどき感じる」「どちらともいえない」人の分布が相談支援センターの利用者・認知をしている者で高くなっていた。

D. 考察

このたびの検討では、がん施策において、全国のがん診療連携拠点病院に設置されているがん相談支援センターが、経済的な困窮や孤立状況からの患者の体験の改善に対して機能しうるかを検討するための予備的な検討として実施した。

今回の予備的な検討では、がん施策として設けられているがん相談支援センターの利用状況により、患者の体験が違っていた。またより経済的な状況や社会的な孤立状況について課題となり得る状況になっているときに、より利用されているという結果であった。これらのことから、がん相談

支援センターの存在や利用は、患者の体験に対して機能しうる施策であると考えられた。今後、改善された新たな調査項目での関連を改めて検討することにより、より明確な結果が得られる可能性がある。

一方で、今回の結果は、横断的な調査による検討結果であり、相談支援センターの利用と患者が体験として報告している状態が、どのような因果関係で生じているのかについては不明である。また経済的な負担状況や孤立状況にある人がどのような状況であるかを把握し、対策を講じていく必要がある。今回は、2014 年度当初の調査結果においては、あげられている設問で十分に把握されていない可能性があったため、複数の周辺領域を含む設問もあげて、一つのがん対策の有用性について検討するにとどまった。今後は、因果関係を検討していくとともに、患者の体験がどのように変化しうるのか、また患者体験調査でどこまで把握しうるのかなどについても検討し、現状の改善に向けたポイントや視点を見つけていくことが求められる。

E. 結論

今回の予備的な検討では、がん施策として設けられているがん相談支援センターの利用状況により、患者の体験が異なり、経済的な状況や社会的な孤立状況がより困難な場合に利用割合が高くなっていた。がん相談支援センターの存在や利用は、患者の体験に対して機能しうる施策であると考えられた。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む。)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

表1. がん相談支援センターの利用・認知状況と経済的・社会的な状況に関わる患者の体験との関連

	全体		利用したことがある		利用しないが知っている		知らない	
	n	%	n	%	n	%	n	%
「経済的困窮への対応状況」に関連する設問								
問20(治療費用負担での治療変更・断念)								
1) ある	160	2.7	26	5.5	69	2.3	65	2.7 ***
2) ない	5727	97.3	449	94.5	2968	97.7	2310	97.3
合計	5887	100.0						
問21(治療費用負担ない場合の治療)								
1) 公的医療保険外の治療 (先進医療含む)	100	64.1	18	72.0	40	59.7	42	65.6
2) 公的医療保険内の治療	42	26.9	4	16.0	21	31.3	17	26.6
3) わからない	14	9.0	3	12.0	6	9.0	5	7.8
合計	156	100.0						
問24(がん診断時の仕事の状況)								
1) 収入のある仕事をしていた	2739	46.9	231	48.7	1442	48.0	1066	45.1
2) 収入のある仕事をしていなかった	3105	53.1	243	51.3	1563	52.0	1299	54.9
合計	5844	100.0	474		3005		2365	
問26(治療中の治療・仕事両立の支援や配慮の状況)								
1) そう/ややそう思う	1810	73.0	161	77.8	980	74.8	669	69.5 **
2) どちらともいえない	295	11.9	18	8.7	157	12.0	120	12.5
3) あまりそう思わない	374	15.1	28	13.5	173	13.2	173	18.0
合計	2479	100.0						
「がんになっても孤立しない社会の成熟」に関連する設問								
問25(がん診断の職場への周知)								
1) 関係者に広く話した	751	27.8	66	28.8	407	28.6	278	26.4
2) 一部の関係者のみに限定して話した	1693	62.6	143	62.5	897	63.0	653	62.1
3) 話さなかった	261	9.6	20	8.7	120	8.4	121	11.5
合計	2705	100.0						
問37(家族からの気を遣われ状況) ***								
1) よくときどき感じる	1420	31.8	121	40.2	822	33.6	477	27.6
2) どちらともいえない	538	12.0	40	13.3	303	12.4	195	11.3
3) あまり全く感じたことはない	2514	56.2	140	46.5	1319	54.0	1055	61.1
合計	4472	100.0						
問38(家族以外の人からの気を遣われ状況) ***								
1) よくときどき感じる	1062	24.6	111	37.6	597	25.4	354	21.2
2) どちらともいえない	603	13.9	43	14.6	343	14.6	217	13.0
3) あまり全く感じたことはない	2659	61.5	141	47.8	1415	60.1	1103	65.9
合計	4324	100.0						
問39(がんに対する偏見) ***								
1) よくときどき感じる	518	11.8	63	21.1	283	11.9	172	10.1
2) どちらともいえない	504	11.5	42	14.1	269	11.3	193	11.3
3) あまり全く感じたことはない	3355	76.7	194	64.9	1824	76.8	1337	78.6
合計	4377	100.0						

p値 *: p<0.05, **: p<0.01, ***: p<0.001

注) 全体の平均値より高い割合となったところを太字で示した。